

序

ステロイド薬の臨床応用は、1948年、重症の歩けなかった関節リウマチ患者にコーチソンの注射を行い、歩けるようになったという米国メイヨクリニックのHenchによる劇的な報告に始まる。その後に判明した種々の重篤な副作用が示すように、ステロイド薬は光と影の両者を併せ持つ20世紀が生んだ偉大な治療薬であることに間違いはない。そして、ステロイド薬は21世紀になっても、最も重要な薬剤の1つとして使われていくであろう。われわれは主に、抗炎症作用、免疫抑制作用を期待してステロイド薬を用いる。短期間の効果は劇的で、安全性もかなり高い。一方、長期間の使用では、少量でも重篤な副作用を生みやすい。このバランスを如何に考え、調整していくかが臨床上の重要なポイントであろう。

ステロイド薬は上記のように古くから使われてきたこと、生命予後にかかるような難治性病態に使われる場合が多く、それらは必ずしも均一な病態ではなく、症例数も多くないことなどから、最近の臨床エビデンスの上位とされるランダム化比較試験がほとんど行われていない領域もある。したがって、それぞれの疾患や病態について、経験的な使われ方をしている場合がかなりある。さらに施設により、その経験や考え方方が異なり、使われ方が異なることも散見されている。

一般的なステロイド薬の使用に際しては、初期投与量と投与薬剤を如何に決定するか、それをどの位の期間投与するか、何を効果判定のメルクマールとするか、どのように減量するか、そして、副作用対策と維持量の考え方、などが主なポイントであろう。

本書ではそれらを各執筆者にできる限り具体的に解説するようお願いした。新しい臨床研修システムになって、若手医師が多く診療科をローテートするようになった。そして上に述べた現状から、実際にステロイド薬を処方する場合に、領域別、疾患別の考え方の相違に戸惑うとの声がある。また上級医も、今までの自分の領域の経験だけでない、他の領域の情報を必要とする症例に遭遇することがある。これらの点で、本書が多くの方々の臨床に役立つことを期待したい。

2007年6月

山本一彦